

ようこそ

神楽の世界へ

鳥取荒神神楽研究会 神楽団

神楽団は、神楽を愛し、その魅力を伝えている集団だ。歴史は浅いが伝統を何より大切にしている。会長・徳林亜美はこう言う、「一人でも多くの人に神楽の楽しさを知ってほしい」。そこには言葉では表せないほどの熱い思いであふれていた。そして、古来神楽の精神が息づいてきたここ日野に彼女の、そして神楽団のルーツがあった。



【神楽団の皆さん】▼後列左から、亀山真也さん、長谷川亨さん、綿辺尚宏さん、亀山直也さん▼前列左から、景山典允さん、佐々木育美さん、徳林亜美さん、柏平紗希さん、伊達徳之さん

～気軽に呼べる小さな神楽です～

鳥取荒神神楽研究会 神楽団

電話 090-1331-6348 (徳林)

ホームページ <http://kagura.kaiz.asia/>

フェイスブック <https://www.facebook.com/kaguken.tottori/>



独特な動きを再現するための特訓が続く

熱い思いで
神楽団を引っ張る
若きリーダー

春の訪れが待ち遠しい4月上旬の夜、JR溝口駅の2階に「鳥取荒神神楽研究会 神楽団」の練習拠点はあった。

およそ12畳ほどの決して広いとはいえない空間に太鼓の勇ましい音がこだまする。そこに恵比寿様・大黒様の躍動感ある独特な動きが合わさり、その場は一瞬にして熱気と神秘的な雰囲気支配された。

その中心にいるのが、会長の徳林亜美さんだ。同研究会は神楽を研究し広めていくことを目的に、彼女が平成23年に設立した団体だ。会員は現在9人、それぞれが仕事の合間を縫い、年間100回以上の神楽公演をこなしている。

彼女が神楽と出会ったのは日野高校時代。一年次にあった部活動紹介で郷土芸能部が見せた舞に一瞬で心を打たれたという。「私と背格好の変わらない女性が大きな大蛇おろちを操っていたんです。それがとても格好よくて」と話す彼女が神楽に夢中になるまでそう時間はかからなかった。加えて、さまざまなイベントや公演に出演する中で、地域とつながっていくことの楽しさに気付くことに

なる。

しかし、高校卒業を機に神楽とのかわりがなくなってしまう彼女に残ったのは一種の寂しさや神楽への熱い思いだった。そんな彼女を救ったのが、地域や恩師とのつながりだった。そこから神楽団の結成、神楽の伝統社中との交流につながっていくことになる。

かつては日野でも親しまれていた神楽

神楽とは神の顕現けんげんともいわれる太古より続く祈りの形で、日本全国にさまざまな形で伝承されている。特に、荒神神楽は、荒々しい神を祭る神楽で、中国山地や備中地方では、10月から1月にかけて、集落の祭りとして行われ、長い場合は何日も舞われるそうだ。

この周辺では、下蚊屋荒神神楽保存会 明神社（江府町）や備中神楽 北山神能社（岡山県井原市）、比婆荒神神楽社（広島県庄原市）が、本格的な荒神神楽を舞う伝統社中として有名だ。

かつて、日野町でもこのような社中の公演や地域でも神楽が舞われていたのを知っているだろうか。昭和46年に「ひの神楽根雨神降社」が設立され、昭和60年代ごろまで地域の人に親しまれてきた歴史がある。

しかし、後継者不足や少子高齢化などの影響からか、かつてのような様子が見られなくなつて久しい。

つなかりを大切に
地域に元気を取り戻したい

そんな中、徳林さんらは「神楽の楽しさを地域の人に知ってほしい」とさまざまな工夫や活動を行っている。神楽団の演じる神楽が、少しでも多くの人に興味を持ってもらおうと、短時間にまとめられているのがその一例だ。徳林さんは「私たちが演じているのは、神楽を知ってもらうための『神楽』なんです。本物の神楽を知るきっかけにしてほしい」と話す。そのほかにも、彼女は平成28年に「あいみ子ども塾」を立ち上げ、子どもたちにその魅力を広める活動を続けている。

「神楽の楽しさを伝えることで地域を元気にしていきたいですね。日野町でも神楽に親しんでいたかつての姿を取り戻りたいです」と力強く話す徳林さん。実は彼女の祖父母は日野町板井原出身だそう。彼女の中に脈々と息づいてきた「神楽愛」が花開いたのは偶然ではなく必然だったのかもしれない。そんな彼女と神楽団の今後の活動から目が離せそうにない。